女子学生の恋愛の類型と性格との関わりに関する研究

○小林小夜子

(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)

キーワード: 恋愛の類型, 女子大学生, 性格

A Study on Relationship between Types of Loving of Female Students and their Personality

Sayoko KOBAYASHI

(Graduate School of Hyogo University of Teacher Education)

Key words: types of loving, female students, personality

目 的

松井 (1990) はリーによる恋愛の類型を測定する日本版尺度を作成するために一連の調査を行い, LETS-2 (Lee's Love Type Scale 2nd version) を開発している。

松井によると, 男性に比べて女性は, キスをする段階までは, 交際相手に対してロマンチックな気持ち (エロス) や, 嫉妬などの激しい感情 (マニア) をもたず, 献身的な態度 (アガペ) も弱いままである。ところが, キス以降周囲の人に相手を紹介する段階になると, 女性も男性と同様にこれらの意識が急に高まる。男性は恋愛の初期から相手を受容する気持ちを強くもつのに比べ, 女性は交際が深まらないうちに相手への気持ちが高まらないわけである。松井の一連の研究の結果は, こうした女性の意識の変化が「ボーイフレンド・ガールフレンド」から「恋人」に移る段階で生じることを明らかにしている。さらに, 6 種類の恋愛類型の代表的人物像として, 文学作品からその登場人物をあげている。これら文学上の登場人物たちには, それぞれのパターンの中で類似した行動特徴があるように思われる。しかしながら, 登場人物の性格に類似点が見られるかに関して, あまり研究がなされていない。

本研究では, 女子学生の恋愛類型を調査し, 実際に恋愛類型が恋愛の段階によって変化するものであるか検証することを第 1 の目的とする。さらに, 恋愛類型は性格と関係があるかについて検証することを第 2 の目的とする。

方 法

- 1) 対象: 短期大学的女子学生
- 2) 手続き: YG 性格検査・LETS-2 (松井, 1990) を使用。妥当性に関する測定及び感想を求めた質問紙。集団で実施。

結 果 と 考 察

恋愛類型が複数あった被験者を除き, 197 人のデータを分析対象とした。恋愛の進行度によって, 恋愛類型に変化が見られるかを調べるため, 「その人はあなたにとって下記のどの言葉に一番よく当てはまりますか。1 つだけ○をつけて下さい。」の項目を, キスの経験の有無によって恋愛の発達が異なるため, 以下の 3 つに分けて分析を行うことにした。

A 群. (恋人, 婚約者・配偶者)

B 群. (ボーイフレンド・ガールフレンド, 片思い, 親友, 友達, その他)

C 群. (当てはまる人はいない)

これら 3 群におけるそれぞれの恋愛類型の出現度数は図 1 に示すとおりである。これらの結果は, エロスが A においてのみ出現していることを示している。松井によると, エロスはキス以降周囲の人に相手を紹介する段階になると, 急激に高まるといわれており, 本研究においても B, C 群には見られず, A 群で登場したことから, 松井の説は支持された。

恋愛類型とその性格特性の関連をみるために, 群ごとに各恋愛類型における YG 特性を比較した。YG 特性については, 12 因子および特殊因子である 6 因子について一要因分散分析

を行った。その結果, A 群では, 活動性 ($F(5,60)=2.19, p<.1$) と思考的外向 ($F(5,60)=1.89, p<.1$) および非内省性 ($F(5,60)=2.26, p<.1$) に有意な傾向があった。活動性ではエロスが最も高くアガペが最も低かった。思考的外向では, エロスが最も高くルダスがもっとも低かった。非内省性では, エロスが最も高くルダスが最も低かった。これらの結果から, A 群においては, 有意差の傾向が見られた 3 要因においていずれもエロスの恋愛類型が有意に他のパターンより高い傾向にあった。すなわち, エロスの恋愛類型の人は, 活動的で思考的に外向であるが内省的ではない傾向が高いことがわかった。

B 群においては, 非協調性 ($F(5,60)=3.230, p<.05$), 支配性 ($F(5,60)=3.31, p<.05$), 社会的不適応 ($F(5,60)=2.56, p<.05$) が有意であった。また, 神経質 ($F(5,60)=1.95, p<.1$), 攻撃的 ($F(5,60)=2.38, p<.1$), 主導性 ($F(5,60)=2.43, p<.1$) が有意な傾向があった。非協調性においては, プラグマが最も高くルダスがもっとも低かった。支配性においては, ストーゲイが最も高くルダスがもっとも低かった。社会的不適応においては, プラグマが最も高くルダスがもっとも低かった。神経質においては, プラグマが最も高くルダスが最も低かった。攻撃的においては, ストーゲイが最も高くルダスがもっとも低かった。主導性においては, ストーゲイが最も高くルダスが最も低かった。これらの結果から, B 群においては, 有意差または有意な傾向の見られた 6 要因において, いずれもルダスの恋愛類型が有意に他のパターンより低かった。すなわち, ルダスの恋愛類型の人は, 神経質ではなく攻撃的でもなく主導性が低い傾向が高いことがわかった。

C 群においては, のん気, 衝動性, 非内省性が有意であった。のん気 ($F(5,60)=2.976, p<.1$), 衝動性 ($F(5,60)=3.43, p<.1$), 非内省性 ($F(5,60)=2.81, p<.1$) のいずれにおいても, ルダスの方がストーゲイよりも有意に高い傾向であった。

以上のことから, 恋愛類型と性格には関連があるという結論に至った。

引用文献

松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美他 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短大紀要, 23, 13-23.